津島寿一先生の縁で

黒田忠雄

私が大平先生との奇縁に結ばれたのは、昭和二十七年の選挙の時でした。常々敬服してやまなかった郷土の大先輩の津島寿一先生が「ときに黒田君、僕の秘書官をしていた大平という男が今度の選挙に出るんだが、応援してほしい」といわれた上に、私が関係していた扶桑塩業組合の重田益次顧問（当時、日本興業銀行参事）の信頼する加藤藤太郎氏（当時、神崎製紙社長）が「人格、識見とも間違いのない人材だ」と推奨したので、この不思議な人脈のつながりを感じて、私は確信をもって選挙戦に立ち向ったのです。

私は津島先生の話で何か非常に切れる男らしいという噂を聞いておったが、選挙で初めて会ったとき、色が黒かったのを強く印象づけられました。そこで、塩業関係者に「立候補なさっている大平先生は、ごらんのように非常に色が黒うて、私どもの仲間のように思われます。非常に真面目で、仕事ができる人ですから何とぞよろしく」と紹介して壇を降りたところ、つづいて立った大平先生が「ただいまご紹介がありましたけれども、色は黒田君のほうがまだ黒いんです」と挨拶して、多数の聴衆をワッと笑わせたのでした。こういうところの先生の話術のうまさというのは、あの風貌からは考えられないようなところがありました。こうして塩業組合関係の先輩知己千余人を中心として、私どもの周辺からも大平支援の輪を拡げて行きましたので、著名な先生方が立候補されており、初陣の苦難な選挙でありましたにもかかわらず、第二位の好成績で当選することができました。

初当選のあと、東京の駒込林町のお宅にご挨拶にうかがいました折、志げ子夫人との面談で、日頃親しい易者

の話として、大平先生が「あなたの出身は香川県の最西端和田村だから、決して下ることはない。上り当選間違いなし。また、あなたの眼は竜眼で、天下をとる相をしている」といわれたという話をうかがいました。

また昭和三十四年頃と思いますが、私がたまたま先生の車に同乗して議員会館へ行く途中に、「先生ご健康に留意されて、将来は総理大臣の要席につかれますようご尽瘁願います」と、失礼をかえりみずブッキラ棒に申しました。すると、先生は「総理大臣という椅子は、人通りの多い銀座で財布を拾うよりも難しいことだ。ただ、その総理大臣になる資格をもつ者を選ぶのは、君たちが握っておるのだよ」と淡々と何気なく申されました。

昭和四十二年、津島寿一会長のあとをうけて塩業組合中央会会長に就任された先生に、昭和四十六年に全国的な塩田製塩の永久廃止に伴う零細塩業者の離職補償と転業助成問題についてご相談しました。当時、法律にもとづく権利ではないので補償できないという専売公社と、許可事業とはいえ多年にわたり営業してきたので権利があるとする塩業者の間で白黒論争を展開していましたが、先生は塩田は廃止しなければいけないとは一言もいわずに「これは時代の流れだから私の力をもってしてもどうにもできないが、いうべきことはいっておきなさい」とおっしゃったことがあります。最終的には補償問題は零細塩業者に厚くする傾斜配分となって、関係者は仁を兼ね備えた名医に脈をとってもらった、といえます。昭和五十年十一月、大蔵大臣ご就任のお祝いの席で、私が「老齢の宇多津後援会長では不似合ですから、この際、前途ある若い者と交替辞任させていただきたい」と申し上げると、先生は「オレが七十歳になるまで辞めないでくれ」と申されました。当時、私はその意味がよくわからなかったのですが、いまにして思いますと生きている一生の間の意味であったかと思われるのです。

二十八年間、真面目に政務に励まれ、戦場でのご功績ある戦死にも勝るご逝去は、私にとってまったく思いもかけないことでした。安らかにご永眠なされますよう、心からお祈り申し上げます。

（扶桑興産会長）